

外国人も受験 本質問い直せ

介護福祉士の試験



東京YMCA
医療福祉専門学校・介護教員
伊東 寛

伊東 寛

今年も介護福祉士の国家試験が終わりました。私が専門学校で介護と試験対策を指導してきた7人のインドネシア人留学生たちも、受験しました。東南アジア諸国との経済連携協定（EPA）に基づいて日本が受け入れた学生たちです。

留学生のほとんどは、母国で4年制大学などを出て、看護師の資格も取得しています。女性が多く、母国に夫や子供を残して来日している人も少なくありません。特別養護老人ホームなどで日本人と同じように介護の仕事を2〜3年間も担い、言語と文化が異なる社会で懸命に努力される様子を、私は見てきました。

しかし国家試験でのインドネシア人留学生の合格率は近年5割前後で、今回は3割台でした。EPAの制度では、5年間のうちに合格を果たせなければ帰国を迫られます。

自己採点をした留学生に「先生方に一生懸命に教えていただいたのに期待にこたえられなくて、ごめんなさい」と涙をポロポロ流されるつらさ。教室で2年間の学びを共有した教職員としては思わず無念のもらい泣きをしまいます。合格できたのは結局、7人中4人でした。

今の試験制度では、留学生たちは原則的に、日本人と同じ出題に向き合います。違いは、漢字にふりがなが振られていることや、解答時間が日本人の1・5倍あること、その程

度です。

私たちは2〜3年の学びだけで外国語の国家試験問題を解けるでしょうか。過去問題を読んできた教職員の一人として、試験のあり方を見直すべきだと思えてなりません。

たとえば、認知症の理解それ自体は大事だとしても、「つじつまの合わない言い方」という日本語を理解していなければ解けない問題を出す意味は、どこにあるのでしょうか。また終末期に向き合う実務も確かに重要ではありますが、たとえば死に装束の着せ方を細かく問うような出題をすることは、介護福祉士の資格を出すかどうかの物差しとしてどれだけ重要なのでしょうか。

介護とは何なのか、高齢者や障害者とはどういう存在なのか。より基本的なことに焦点を当てた、グローバル化時代に即した試験であってほしいと思います。出身国での経験や資格を試験での評価に組み入れる方法も考えていいでしょう。

留学生の多くは、実務面では日本語でのコミュニケーション能力を十分に持っています。口語での日本語能力や笑顔、人懐こさなどを生かして、介護現場での仕事を実際に担当しているのです。私の知る留学生たちは、勤勉で、わざわざ海外で勉強しようという意欲もあります。優秀な介護の人材が日本から逃げていく現実を、直視すべきです。